The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<文献紹介>フィリップ・ゴフ編著『スピノザの一元論』Philip Goff (ed) : Spinoza on Monism, Palgrave Macmillan, 2012.
Author(s)	立花, 達也
Citation	メタフュシカ. 2016, 47, p. 93-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/59483
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《文献紹介》
フィリップ・ゴフ編著
『スピノザの一元論』
Philip Goff（ed）: *Spinoza on Monism*, Palgrave Macmillan, 2012.

立花達也

本書は、現代哲学における一つのトピックを哲学史における主要な思想家と連結させる野心的な叢書、“Philosophers in Depth” の中の一冊として編まれた論集である。現代形而上学における一元論に関する 8 本の論文を集めた第一部と、スピノザにおける一元論に関する 6 本の論文を集めた第二部から成る。編者のゴフの狙いは、現代一元論を批判的に検討したあとで、この現代形而上学的な背景に反してスピノザの観点から一元論を再検討することによって、一元論が将来の形而上学において占めうる場を明らかにすることにある。しかし、管見の限りでは、その企てがうまくいっているとは言い難い。この論集はおそらくスピノザと現代形而上学の対話に必要な要素を多く含んでいるが、それらは未だ論者同士の建設的な議論へと組み上げられていないのである。

そこで本稿では、議論の発端となった主要論文（§1. ジョナサン・シャッファー「一元論：全体のプライオリティ」）を第一部から、その枠組みにスピノザの哲学を適用させようという試みに正面から挑んだ唯一の論文（§9. ギーラン・ギゴン「スピノザにおける合成とプライオリティ」）を第二部から、それぞれピックアップして紹介することで、これらの議論が第二部のスピノザ論とどう関わりうるかを見つつ、スピノザから現代形而上学へと投げ返される観点を明確にしたい。

1．プライオリティ一元論（PM）としてのスピノザ解釈（§1）

第一節ではシャッファーが示した一元論の枠組みを紹介する。一元論を「一つのものしか実在しない」という主張として想定するなら、我々の目の前にある机や椅子はどうなるのか、それは実在しないのかと訝しむのはごく自然な反応であろう。しかし、机や椅子は宇宙に依存する部分としてあくまでも存在しており、この全体としての宇宙を基礎的な[1]具体的対象として見なすの

[1] シャッファーは fundamental と basic という二つの語を用いているが意味上は特に使い分けていないように思われる。混乱を避けるため「基礎的」で統一する。

が一元論であるとすれば、それはもっと受け入れやすい考えとなる。これがまさにシャッファーが提示する「プライオリティ一元論（Priority Monism）」（以下 PM と略）である。彼によってスピノザは、この説を唱えた先行者として再び評価される。

１．１　基礎的メレオロジーにおける一元論と多元論の対立の枠組み

彼のアイデアは、宇宙を基礎的対象に区分けする仕方においてメレオロジー（部分と全体の関係についての理論）を適用することで、一元論と多元論の対立を、基礎的対象が一つの全体であるかその多数の真部分（proper parts）であるかという対立へと組み換えることにある。そして、この対立を成り立たせるのが「基礎的メレオロジー」である。それはメレオロジカルな構造とプライオリティの順序を接続することによって与えられる。

シャッファーはまず、宇宙が現実的な具体的対象[2]として存在し、その真部分も同様に存在する（メレオロジカルな構造がある）ということを擁護する（§1. 1. 1）。次に、現実的な具体的対象のあいだには形而上学的な依存関係があり、それが整礎半順序（well-founded partial ordering）[3]を成す（プライオリティの順序が存する）ということを擁護する。宇宙の中には、依存関係の系列がそこでストップする基礎的な対象（他のものに依存しないもの）がなければならない（§1. 1. 2）。最後に、メレオロジカルな構造とプライオリティの順序をタイリング制約（tiling constraint）によって結びつける。タイリング制約とは、すべての基礎的対象は重複なく（あるいは、ある基礎的対象が他の基礎的対象の部分になることなく）宇宙全体を覆わなければならない、という制約である。この制約は区分け制約（partitioning constraint）として理解されうる。すなわち、基礎的メレオロジーの問いに対する答えは、宇宙を基礎的な諸ピースへと区分けする仕方によって、排他的かつ網羅的に与えられるのである。宇宙を一枚のピザと見なしてみよう。ピザは全体を切らずに残すことも、半分にしたり四分割したりすることもできる。このとき、宇宙全体を切らずに残すのが一元論であり（宇宙全体が基礎的対象である）、宇宙をいくつかの部分に切り分けるのが多元論ということになる（いくつかの真部分が基礎的対象であり、宇宙全体はそれらに依存する）。ここで注意すべきは、いかなるメレオロジカルな構造でもプライオリティの順序と対応する、などとシャッファーは述べていないことであろう。彼が両者に対応を見るのは、あくまでタイリング制約のもとで、基礎的なのは部分と全体のどちらかという問いを排他的かつ網羅的に設定するためである。なので、一元論においても宇宙が真部分をもつことは承認されるし、諸部分がそれらから合成される全体に対して相対的にプライオリティをもつことも許容されうる（p. 19）。

このように一元論と多元論を対立させる枠組みを整えたあとで、多元論よりも一元論の方が優

---

[2] シャッファーの関心は現実的な具体的対象（actual concrete objects）にしかない。たとえば、可能的な具体的対象や、現実的な抽象的対象などは議論から除外される。

[3] 半順序構造は、依存関係が非反射的（自分自身に依存しない）・非対称的（相互に依存しない）・推移的であることを要請することで与えられる。もし依存関係が循環構造を成していると仮定しても、推移律によって反射性が成立してしまうため不可である。整礎性はプライオリティの連鎖が無限後退することを防ぐ。この整礎半順序を背景にすることで、何が基礎的であるかを問うことができる（基礎付け主義の要請）。

れている四つの論拠が示される（§1. 2）。それは 1. 常識的観点による擁護、2. 量子力学との親和性、3. 世界の異質性に関する議論、4. 原子のないガンク（atomless gunk）[4] の問題であり、特に 2 と 4 が主要な論拠であるとされる。

こうしてシャッファーが擁護してきたような一元論、すなわち PM は、もう一つの一元論である「存在一元論（Existence Monism）」から区別される（以下 EM と略）。これはまさに唯一の具体的対象だけが存するというラジカルな立場である。後者が成り立てば必ず前者も成り立つが、逆は真ではないという意味で EM はより強い主張であると言える。シャッファーの功績は、存在多元的な一元論が成立することを PM によって示したことにある。

１．２　シャッファーのスピノザ解釈

シャッファーはスピノザに PM を帰している。その主な根拠は Ep32 にある[5]。スピノザはそこで「すべての物体は一定の仕方で規定されて存在する限りにおいて、全宇宙の部分として、その全体と一致し、残りのものと結合するものと見なされなければならない」と述べているが、これをシャッファーは「統合されたシステムとしての世界（the world as an integrated system）」というアイデアを示すものとして読む。しかし、このような世界は EM と両立しない。なぜなら、このアイデアの支持者はシステムへと統合される部分の実在にコミットするが、EM は全体（宇宙）以外のいかなる存在者も否定し、従って宇宙へと統合される諸々の事物が存在することも否定するからである。これに対して PM であれば、なんら問題なくこのアイデアに適合する（p.39）。

しかし、次節で確認するように、この解釈はスピノザの正当な評価とは言い難い。また、シャッファーは別の論文で、ベネットのスピノザ解釈（「場の形而上学」）を引きながらスピノザを EM として評価することもある[6]。このように、現代形而上学の枠組みにおけるスピノザ的一元論の位置づけはいまだ不安定である。

２．メレオロジーの虚構主義としてのスピノザ（§9）

第二節では、以上の枠組みを受け、スピノザの哲学がいかに解釈されるべきかを再検討したギゴンの議論を紹介する。その批判の要点は、スピノザにおける実体と様態はメレオロジカルな関係にないということにある。自然において生じる合成は虚構主義的に成立するとされる。

２．１　基礎的対象としての実体・メレオロジカルに単純な実体

まずテクスト的な事実とその解釈から始めよう。実体はそれ自体で存在し、それ自体によって

---

[4] そのどの部分もそれ自身の部分をもっており、それゆえ原子的な基礎を形成する究極的な部分をもたないような物質に名付けられた名前（p.32）。ガンク的な世界では部分が基礎的対象になりえない。また、ガンクは形而上学的に可能であると考えられるので、あるガンク的な可能世界が存することになる。ところで、基礎的対象が部分か全体かという選択は全可能世界で同じ仕方でなされるので、選ばれるべきは全体のみとなる（§1. 2. 4）。

[5] スピノザの引用箇所の指示については Studia Spinozana の citation convention に従う。訳は畠中尚志のものを参照し、必要に応じて改めた。

[6] Cf. Schaffer. 2007（Feb 24, 2014 edition）. ‘Monism’ in the Stanford Encyclopedia of Philosophy. 場の形而上学に関しては cf. Bennett, *A Study of Spinoza’s Ethics*, Indianapolis, Hackett, 1984.

考えられるものと定義され（E1Def3）、様態は実体の変状として、他のものによって存在し、他のものによって考えられるものと定義される（E1Def5）。以上より、実体は本性上、様態に対してプライオリティを有する（E1P1）。ギゴンに従えば、実体は基礎的対象であり、様態は実体に対して存在論的に依存していると解釈できる（p.187）[7]。また、様態は他のものへの依存によってであれ存在するものとして認められるのだから、スピノザは存在多元的であって EM ではない。

ところがスピノザは PM でもない。彼は実体の不可分性を主張しているからだ。簡潔に言えばその根拠は、実体が永遠無限であることと全体に対する部分のプライオリティに存する[8]。部分のプライオリティを徹底し、かつ実体が実在的に区別される部分をもつとするなら、実体はまさにこの構成部分によって存在することになるが、それは他のものに依存せずに存在するという永遠無限な実体の本性に反する。これに対してスピノザは実体が実在的な部分をもつという前提を否定し、実体はメレオロジカルに単純であるとすることで整合性を保つのだとされる（E1P15S）[9]。

要するにギゴンによれば、実体は様態に対してプライオリティを有すると同時に、部分をもたない。これはシャッファーの PM に反する。なぜなら、背理法により、すべての現実的な具体的対象がその部分であるようなある事物が存在するのだと仮定してみると、スピノザは全体に対する部分のプライオリティを自明視しているのだから、その事物は実体ではありえず、それゆえ基礎的対象でもないことになるからだ（p.189）。つまりは、唯一の基礎的対象（実体）が存在するが、その他の具体的な諸対象（様態）はその基礎的対象の部分として規定されることなくそれに依存して存在する（実体の変状である）という立場こそがスピノザ的一元論、すなわち「実体一元論（Substance Monism）」なのだというのがギゴンの解釈である。

２．２　メレオロジーの虚構主義

だが、ここで問題が生ずる。確かにスピノザは「部分とか全体とかは真の有ないし実質的有ではなくて単に理性の有に過ぎない。従って、自然の中には全体も部分も存しない」（KV1, 2）と述べているが、それにも関わらず彼は自然において生じる合成についても言及している。これは矛盾なのではないのか。また、自然が部分をもつかのように述べたテクスト（Ep32, E2P13L7S）も存するが、これをどう説明するのか。

ギゴンによれば、これらはすべて理性的合成（composition of reason）によって説明される[10]。スピノザにとって部分と全体は「理性の有（being of reason）」であるとされる。それはものの理解に役立つ思考の道具のようなもので、その実在にコミットしない概念であると解釈される。この理性の有としての部分による合成が理性的合成であり、それは部分の実在にコミットしない。

7　ただし、スピノザが実体を自己原因によって規定していることを実体における依存関係の反射として解するのであれば、シャッファーの枠組みで理解するのはより困難になる。

8　Cf. E1P12, P13, P15S.『エチカ』以外では cf. KV1/2, CM2/5, Ep40. また、全体に対する部分のプライオリティについては cf. E1P12D, CM2/5, Ep35.

9　メレオロジカルな構造と部分のプライオリティが完全に一致するという想定がおそらく重要であろう。さもなくば、実体が実体的部分（基礎的であるような部分）をもたないだけでなく、いかなる意味においても真部分すらもたないという帰結は導けない。ギゴンによる注 8（pp.202-3）、シャッファーによる注 17（p.42）も参照のこと。

10　ギゴンは CM2/5 に対する独自の解釈によってこの合成の概念を導出する（§9. 3）。

それでもスピノザは「人間身体を合成する部分」（E2P24）などと、様態における合成、すなわち様態的合成（modal composition）について普通に述べるわけだが、ギゴンによればこれは規約（stipulation）によって説明される。諸物体の合一（諸物体がその運動を互いに一定の割合において共有化すること）による個体の定義（E2P13S のあとの Def）は規約的定義であるとされ、それによって「ある全体が様態 x と様態 y から合成される」という命題は「様態 x と様態 y がともに一定の仕方で触発される」こととして規約され、文字通り客観的に真となりうる[11]。

ただし、様態的合成は対象を複合物と認めるので、実体には理性的合成しか適用できない。ゆえに、実体は実在的な部分から合成されない。つまり、実在的合成（real composition）は不可能である。シャッファーが引用した Ep32 におけるメレオロジカルな表現は、物体が自然ないし実体の様態であるということを読み手にあわせて語ったに過ぎないとされる（pp.200-1）。

３．展望：スピノザ的一元論に向けて

スピノザの「実体一元論」からシャッファーの枠組みに対して、どのような観点を投げかけることができるだろうか。それについて述べる前に、ギゴンの解釈は特にメレオロジーの虚構主義（2. 2）に関してテクスト上の困難を数多く含んでおり、およそ批判なしに受け入れられるものではないということは注意しておくべきだろう[12]。だがおそらくギゴンの本当の功績は、具体的対象を宇宙の真部分としてメレオロジカルに規定することなく、それらを唯一の基礎的対象に依存させるような一元論がありうることを示した点にある[13]。その可能なオプションの一つが、ギゴンにとってはメレオロジーの虚構主義だったのである。

第一に、以上の点について、§10（イツァーク・メラメド「なぜスピノザはエレア的一元論者ではないのか（あるいはなぜ多様性が存在するか）」）と §11（スティーヴン・ナドラー「スピノザの一元論と有限なものの実在性」）は新たなオプションのための考察として読むことができる。ギゴンの解釈が抱える最も深刻な問題は、個物の実在や多様性がスピノザにとって幻想でしかないという結論を招きうることであるが、それこそ現代の多くのスピノザ研究者が抵抗した、

---

[11] 厳密には、メレオロジーの命題が規約的に真でありうる点で、ギゴン的スピノザは虚構主義（メレオロジーの命題はすべて偽であるとする）ではない。とはいえ、様態的合成を除けば、実体の部分について虚構主義を採っているは確かである。この紹介ではゴフ（p.5）とシャッファー（*op. cit.,* n.32）に従い、虚構主義者として単純化した。

[12] KV1/2 で部分と全体が理性の有とされることのみから、様態における合成を理性的合成（＋規約）によって説明する解釈を E1P15S と Ep32 のテクスト読解によって裏付けるのは難しい。E1P15S には物質（延長実体）の部分は様態的に区別されるともある。ギゴンはこれを様態的合成の肯定として読むが、それならば実質的に実体の様態的合成を認めたことになるだろう。Ep32 には部分／全体を、他のものとの適合／不適合によって規定する考えが認められるが、彼はこの点にも目を向けない。ギゴンに対する明確な反論として cf. Laveran, *Le Concours des Parties*, Paris, Classiques Garnier, 2014.

[13] ギゴンは PM を二つに分類する。弱い PM（WPM）は、基礎的対象が一つであるという主張であり、強い PM（SPM）は、(1)宇宙以外の具体的対象は宇宙の真部分であり、かつ（2)全体は部分に対してプライオリティを有するという主張である。ギゴンの解釈によれば、スピノザは存在多元的かつ WPM ということになる（p.189）。具体的対象は宇宙の真部分であるとするメレオロジカルな想定なしに、唯一の基礎的対象があるというだけでは第一節で示した PM は導けない。これを受けて後にシャッファーは、この PM を改めて“priority monism（cosmic）”と呼び直し、WPM から区別する（cf. *ibid.*）。

ヘーゲルによる無世界論的なスピノザ解釈に他ならない。つまり、スピノザは様態の実在性を、基礎的対象（実体）のメレオロジカルな部分とする以外の仕方で与えなければならないのである。この文脈において、スピノザ哲学における様態の実在性という古典的問題を扱い、各々の仕方でこれを擁護する §10 と §11 は、現代の一元論を別の仕方で形式化することに寄与するかもしれない。

第二に、§12（モーゲンス・レルケ「スピノザの一元論？　どんな一元論？」）は、一元論的主張の意味それ自体を再考させるだろう。シャッファーは何に一性（oneness）を帰属させ、どのように単位を数えるかに応じて一元論を分類できるとする[14]。しかしスピノザは、数的な概念としての一性は消極的なものであり、それで実体＝神を規定することはできないとする。この意味で、スピノザはそもそも一元論者ではないのである。では、スピノザは実体の数的でない唯一性をどのように論証しているのか？ §13（マーク・クルシュタッド「スピノザによる一元論の論証：擁護の新しい方法」）は、そのためにスピノザが与えている論証をいかに解釈するべきかという問題を扱っている。

はじめに私は、編者の企てがうまくいっていないと述べた。だが、この論集には、将来の一元論のためのヒントが確かに詰まっていると思われる。これらがさらに展開され、現代形而上学の読者が第二部を読み、スピノザ研究者が第一部を読むような交流が生じることを願う。

（たちばなたつや　哲学哲学史・博士後期課程）

[14] Cf. Schaffer, *op. cit.*